

公開・国際シンポジウム「礼拝像と奇跡 東西比較の試み」

礼拝像と奇跡

——東西比較の試み

秋山 聰

これまでのシンポジウム

グローバル COE『死生学の展開と組織化』およびその前身である 21 世紀 COE『死生学の構築』では、これまでに 2 度、東西宗教美術の比較研究を主眼としたシンポジウムを開催してきた。初回は、2006 年 12 月に開催した『聖なるイメージ——彼岸とのコミュニケーションの手段として』、2 回目が 2007 年 12 月の『聖遺物とイメージの相関性——東西比較の試み』である。初回のものは、ゲアハルト・ヴォルフ氏と奥健夫氏を招き、まず手始めとしてキリスト教美術研究と仏教美術研究における聖像についての研究状況を相互に提示しあい、今後の比較研究の可能性を模索する端緒的な試みだった。そこでは双方で使用されてきた用語・概念についての共通理解や翻訳という点で課題は山積するものの、研究成果の交換が相互に十分に刺激を与えうることが確認されたように思う。その上で、より論点を絞って議論を交わしたのが 2007 年のシンポジウム『聖遺物とイメージの相関性』だった。海外からエリック・トゥーノ、スコット・モントゴメリーの両氏、国内からは肥田路美氏、根立研介氏に参加していただいたこのシンポジウムでは、聖遺物崇敬／舍利信仰／遺骨信仰をめぐる東西双方の研究の蓄積の交換により、「聖遺物とイメージの相関性」という点においてはキリスト教と仏教との間に様々な共通点（像内納入、王権との密接な関連、辺土意識など）が存在す

ることが浮かび上がってきた。²

「世界美術史」という研究動向

ところで2007年9月、私は妙な成り行きから、ジョン・オナイアンズ氏がイースト・アングリア大学において企画されたシンポジウム『世界美術史
さまざまな進路』³において、これまでの私たちの試みについて話をする機会を得た。このシンポジウムに参加することにより、「世界美術史」が目下、国際的に熱い注目を浴びつつある新たな研究動向の一つであることを認識するに至ったが、些か驚いたことが二つある。一つは、「世界美術史」に携わる人々が、従来は美術史学の研究対象とされてこなかった様々な地域について極めて熱心に研究されていることであった。しかし同時に、異なる地域を対象とする研究者の間での比較研究の試みがそれほどなされていないらしい、ということにもとりわけ驚いた。小佐野重利氏との連名によるペーパー「日本における比較美術史の試み」の内容は、ごくありふれた試みの紹介だとばかり思っていたのだが、発表後、参加者の方々から思いがけない反応をいただいた。とりわけ不思議だったのは何人の方から「比較って面白いんだね」と好意的な声をかけられたことである。世界各地の美術についての研究体制は整いつつあるが、異なる地域の美術間の比較についてはあまりまだ行なわれていないということを嘆く方が少なからずおられたのである。私たち日本の研究者は、美術史に限らずさまざまな分野で、日本の事例を他の地域の事例と様々に比較することに、慣れ親しんでいるところがある。そのため、このような反応は逆に私には大きな驚きであった。

私たちの、自らの文化や芸術を相対化すべく、好んで他の文化と比較する傾向は、必ずしも国際的な常識ではないらしい。我が国で行なわれてきた比較は、多分に自国と他国との比較であるために、必ずしも客観的なものとは言いきれない側面がある。実際「日本史」、「世界史」という教科区分にうかがわれるように、我が国で「世界」とは、しばしば真にグローバルな意味での世界ではなく、「日本を除いた世界」を意味することには、自覚的である

べきだろう。しかし、長年比較という視点で自らの文化や芸術を考察してきたことは、あるいは、日本の美術史学のプレゼンスが低下する可能性をも孕む、「世界美術史」という現在の美術史学の一大潮流の中で、逆に一つの強みになりうるかもしれない。

比較宗教美術史の試み

前回のシンポジウム『聖遺物とイメージの相関性』においては、聖なる人物の遺骨ないし遺物という意味での聖遺物という点に関しては、キリスト教文化と仏教文化との間で、極めて類似した現象が多々認められることが浮かび上がってきた。一方で、異なる宗教美術間での意味のある比較を行なうためには、時には従来の常識からの脱却が必要であることも判明したように思われる。例えば、近代美学以降の外形・外観を重視した美術諸ジャンルの明確な弁別が、本来なされるべき比較を妨げている面があるのではないだろうか。コンク修道院に伝わる「聖フォワの聖遺物容器」(図1)のようなキリスト教中世を代表的する聖遺物容器は、たとえ人物像の姿をしていても、伝統的に金属工芸とみなされる。一方、清涼寺釈迦如来像(図2)のような仏像は、迷うことなく彫刻に分類される。しかしながら、こうした仏像の胎内にまま仏舍利を初めとする様々な事物が納められていることは広く知られており、こと「機能」という点においては、両者は全

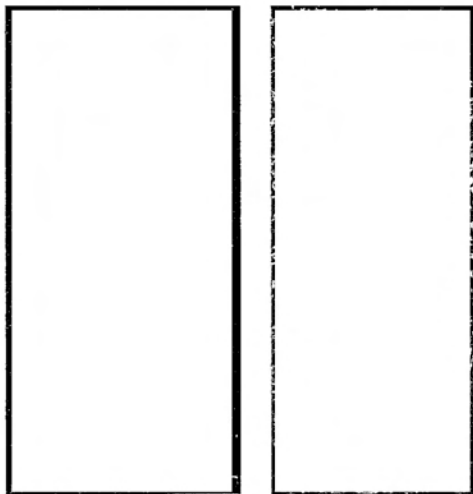
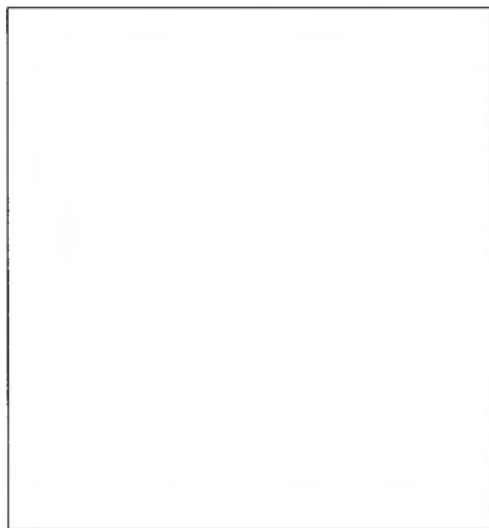


図1(左) 聖フォワの聖遺物容器、コンク、聖フォワ大聖堂宝物館

図2(右) 釈迦如来像、京都、清涼寺

く同じ地平に立っている。聖なるものの「容器」として、両者は数多の共通性を有しているのである。さらに聖なるものの「容器」としては、仏塔を挙げることも可能だろう。通常、人は例えば五重塔と西洋建築を比較しようとすると、ゴシック教会の尖塔を挙げるのではないだろうか。しかしこれは建造物の外観に捉われた比較と言えよう。五重塔はむしろ聖なるもの、聖遺物としての仏舎利を安全に保管するという機能を有しているとみるならば、これと比較すべき対象は教会の尖塔などではなく、聖遺物容器あるいはむしろ聖遺物を不可視のままに安泰に保つという点においてキリスト教聖堂内の祭壇であるべきではないだろうか。仏舎利やご神体を不可視の状態で聖域の中核とし、みだりに信徒の立ち入りを許さないという点からみて、仏塔や神社の社は、聖遺物容器の原初形態とも言える祭壇と多くの共通点を有している。このことを踏まえれば、例えば数多くの祭壇を有するキリスト教中世の聖堂(図3)と比較すべきは、神社の本殿などではなく、様々なご神体を祀る社が立ち並ぶ神社境内だということになるだろう。近代以降五感の中で視覚が圧倒的優位を占める中で、どうやら我々はものの外形や外観に捉われすぎて

きた嫌いがある。宗教上の造形の機能についての研究は、近年キリスト教美術史においても、仏教美術史においても格段に深化してきており、それらの成果を持ち寄って造形の機能という側面に軸足を置いた比較研究こそが、これからの宗教美術比較に一層の実り豊かな成果をもたらすのではないだろうか。



かつて像は動き得た

このように、礼拝像の機能に関する比較宗教美術史的探求には、ともすると近代以降のジャンル分化が大きな弊害をもたらしうと思われるのだが、これに加えて礼拝像がこれまた近代的産物である美術館に入って世俗化ないし「芸術」化してしまうことによる弊害もあるようだ。端的に言えば、礼拝像は美術館に入ることによって、「動かなく」になってしまうのである。今日私たちは美術館に安置された礼拝像が、平面像であれ、立体像であれ、誰もが不動のモノであることを確信している。それ故に、テレビ番組の中で、銅像に扮した人物が動くわけがないという常識を前提として、さまざまにいたぶられた上で、最後に怒りのあまり動き出すことによって、視聴者が笑うというような現象が起きるのだろう。しかし、礼拝像は、近代になって美術館に入る以前には、動く、泣く、話す等さまざまな生動性を示していた。今日、欧州の観光都市のそこそこで「ムーヴィング・スタチュー」と呼ばれる大道芸人（図4）が活躍しているのは、あるいは像が動いていた時代への郷愁が、演じる者や見る者の意識の底流にうごめいているからかもしれない。仏教でもキリスト教でも、かつて像が、今よりももっとダイナミックな様相を示しており、生動性を示しうるものとして人々に捉えられていたことは、例えばハイスターバッハのカエサリウスによる『奇跡をめぐる対話』や『日

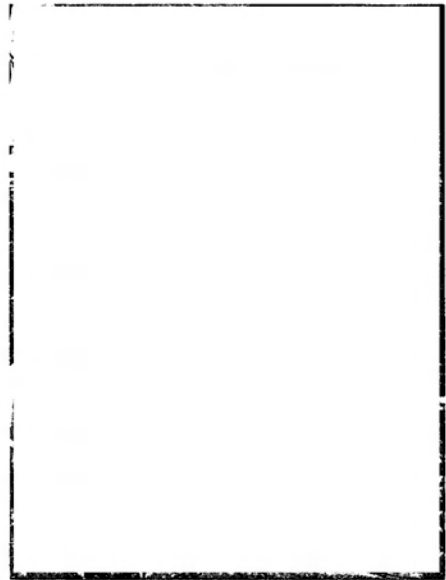


図4 フィレンツェ、ウフィッツィ美術館前の「ムーヴィング・スタチュー」

本『靈異記』などをはじめとする東西の数多の史料が物語っている。仏教において、仏像が動けば、何らかの奇瑞とみなされたように、キリスト教中世においても、かなり早い段階から、聖遺物と同様に聖像は神が地上においてその力を行使する際の媒体と捉えられ、像が動くということは、神の力の行使を目の当たりにするという恩寵を意味したのである。

本シンポジウムについて

さて、本日のシンポジウムでは、美術館に入る以前の礼拝像に対する人々のこのような期待や祈念のあり方の諸相を、礼拝像と奇跡というテーマに絞って考察しようと思う。かつて人々は像に向かって、死後の平安や現世での救いを求めて、様々に祈り念じた。この点は、キリスト教においても仏教においても同様だったと思われる。2006年のシンポジウムにおいて明らかになったように、像は死後の世界ないし天界との回路であり、死と生を繋ぐ役割を果たしていた。しかし礼拝像をめぐる信仰には、理論と実践が比較的合致して展開した聖遺物崇敬に比べて、相当に複雑な側面があったことが、2007年のシンポジウムを通じて改めて認識された。そこで、今回は、像はどのようにして奇跡を起こしうるのか、あるいはどのような像が、奇跡を起こすことを期待されたのか、また奇跡を起こしうるとみなされた像がどのように扱われたのか、といった問題を中心に取り扱ってみたいと思っている。

礼拝像や祈念像は天界ないし死後の世界とコミュニケーションを取るための手段の一つだが、ただ像だけでは必ずしも有効なメディアとしては機能しないようだ。多くの場合、像はある特定の場所と結びついたり、特別な儀式に用いられてはじめて、動き、奇跡を起こした。「像と場」の問題については、長岡龍作氏が仏教の事例を検討されるが、像と場との複雑な関係性についての議論の端緒を切る発表となるものと期待される。

また宗教美術史研究においては、その対象が専ら前近代に偏りがちな傾向があることは否定できない。かつての人々の像に対する期待や祈念について研究する人々の多くは、近現代における同様の現象については一顧だにせず、

むしろ無知蒙昧の所業として切り捨ててしまうことが多いように思われる。しかし礼拝像に対する心性は、実は常変わらず現代にも綿々と伝わっている。その命脈が通常大学や美術館・博物館の研究者にまでは届いていないだけ、と言ってもよいかもしれない。アイヴァン・ギャスケル氏の発表は、ともすると研究者が捨象してしまう現代の礼拝像に果敢に取り組まれたもので、我々に新たなアспектを提供してくれるものと期待される。

加須屋誠氏は、往生という奇跡をわが身に起こすためのイメージ・トレーニングの手段としての絵画の役割や、現実にかきた奇跡の記録としての像の意味や機能およびその開示方法などについての考察を展開される。自らにも奇跡が起きることを冀う多くの人々の期待を背景にしての造像ないし作画行為についての東西比較の端緒ともなりうる事例を紹介して下さるだろう。最後にゲアハルト・ヴォルフ氏は、呪力とも言うべき特別な力を備えた像と美的特質ないし芸術性との関わり、またそうした聖像と観者＝信徒との相互交渉などについて、ハンス・ベルティンクの研究を批判的に発展させた発表をされる予定である⁴。

以上の四氏の発表の後に、本グローバル COE の事業推進担当者である大稔哲也氏に、イスラーム文化研究の立場から聖遺物や聖像に関連したコメントをいただき、さらに、我々の一連のシンポジウムについて常にブレーンのような役割を果たしている文化庁の奥健夫氏にも仏教彫刻史研究の立場から、興味深い諸事例の紹介を含めてのコメントをいただく予定である。

ところで、本日四番目に発表を予定されるヴォルフ氏は、実はまだ会場に到着されていない。既に成田空港には着いておられるとの報は得ているが、会場に到着されるまでにはもう少し時間がかかるように思われる。ヴォルフ氏の恙無い到着を願って、ここに一度ヴォルフ氏の画像（図5）を投影してみよう。先ほど取り上げた「動く礼拝像」の話为例にとり、この写真を礼拝像と仮定するならば、我々の祈りの念が通じれば、超越的な力によって、この像が動くことが期待できる。果たしてこの像（＝ヴォルフ氏の肖像写真）への我々の祈りが通じて、この像が動き出すか否か（つまりは、プロトタイプ（＝ヴォルフ氏自身）が現れるか否か）については、このシンポジウ



図5 ゲアハルト・ヴォルフ氏近影

ムの参加されている方々自身が目撃者となるわけである。主催者としては切に「ヴォルフの奇跡 *miraculum wolfensis*」を冀いつつ、主旨説明を終わりとしたい。

■ 註

- 1 『文化交流研究 東京大学文学部次世代人文学開発センター研究紀要』第20号(2007)、pp.57-146。
- 2 和文は『死生学研究』11号(2009年3月)、pp.355-436。英文は *The Interrelationship of Relics and Images in Christian and Buddhist Culture*, ("Death and Life" and Visual Culture I), Global COE Program DALs, Tokyo 2009 として刊行。
- 3 A. Akiyama, "Comparative Art History in Japan: the Present and the Future", 『文化交流研究 東京大学文学部次世代人文学開発センター研究紀要』第22号(2009)、pp.51-64。
- 4 一昨年のシンポジウムでも聖像が、正当な扱いを受けない場合に祟りえたということが、東西双方において確認された。例えば、「踏み絵」は、敵対宗教の信徒にとって聖像とみなされるようにと、迫害者によって作られた極めて珍しい「聖像のネガ」だが、長崎では新年の年中行事となった「絵踏み」の際、「ロザリオの祝祭」を主題とする「踏み絵」を踏まされた地区の人々は、その1年不幸に見舞われると言われていたらしく、聖像の力は、敵対宗教の信徒にも「祟り」として作用しえたことを示している。像は、宗教の相違を超えて、その力を発揮しうるのである。

(あきやま・あきら 東京大学大学院人文社会系研究科准教授／グローバルCOEプログラム事業推進担当者)